



今月は、大工だった父との話をさせていただきます。
父の故郷は、岩手県花巻市(旧東和町)です。中学校を出ると、距離で30キロほどの山を幾つも幾つも越えた隣の遠野市へ、すぐに丁稚奉公に出たそうです。どんな丁稚生活を送っていたのかは、聞いたことが有りませんが、今の生活からは、想像も出来ない厳しい環境だったに違い有りません。



やがて丁稚かあけると、上京して大工職人として忙しい毎日だったようで、家族を必死に養って生きていました。当時は、そのころ、高度経済成長期、休みも無く、365日働き通しだったことと思います。



小学生の頃、基礎工事の終わったこから建ておの現場など、度々現場に連れていかれたことか思い出します。好奇心旺盛な子供には、現場は正に絶好の遊び場です。そういえば、良く、材料の切り端や釘も使って色々な物を獲物に作って兄弟や近所の子達と遊んでいました。高校生の頃は、現場や作業場へアルバイトに良く連れて行かれていました。結構いいお小遣い稼ごになり、有り難かった思い出が有ります。ただ、汗まみれになり、汚れるのは、嫌だった記憶が有ります。



学生時代は、土建屋さんのアルバイトに行くと、「今日は何をやめたのか？」などと、質問を決定して来ました。当時、そんな事が唯一の共通の話題となるからだったと思います。この頃までは、将来、この建築の業界で働く事など、こい、ほ、ちも考えていませんでした。それどころか、「汚い仕事は嫌だ、やるならスマートな仕事がいい」といった甘ったれた発言でした。学校を卒業し、いよいよ就職活動となりましたが、サラリーマンとして、旅行会社に就職させてもらい、楽しい毎日を送り始めます。しかし、働きはじめ、初めがかなり真剣に将来のことを考え始めるようになります。自分が本当にやりたいことは？このままでいいのかどうか？



父は、一言も建築をやってみないか？などと言ってくれた事はありませんでした。ただ、一つ言える事は、働き始めてから、初めて父の偉大さに気づかされた事です。社会に出て働くという事は、こんなに大変な事なんだ、理不尽なことでも何かも受け入れなければならぬ世の中の広さを同時に教えてくれた。又、生半可な知識や技術では、世の中は認めしてくれないという事。

建築をやるからには、技術の積み重ねが必要と思い、父に「大工を教習欲しい」と頼み、弟子入りさせてもらいました。同時に知識の習得も重要と思い、職人としてのから、独立を目指し、夜間学校に通い、いくつかの資格も修得させてもらいました。技術的なことは、墨付けや階段、和室の造作など、本当に解りやすく、丁寧に教えてくれました。そう思うと今のリフレットの原点は正に父ということになります。

今、改めて思いますが、父が大工さんで本当に良かった。そのおかげで、今、こうしてこの仕事をさせて頂いているという事です。この場をお借りして改めて父に感謝させていたいただきます。ありがとうございます。

平成二十二年十月吉日 多田良雄